



俳諧

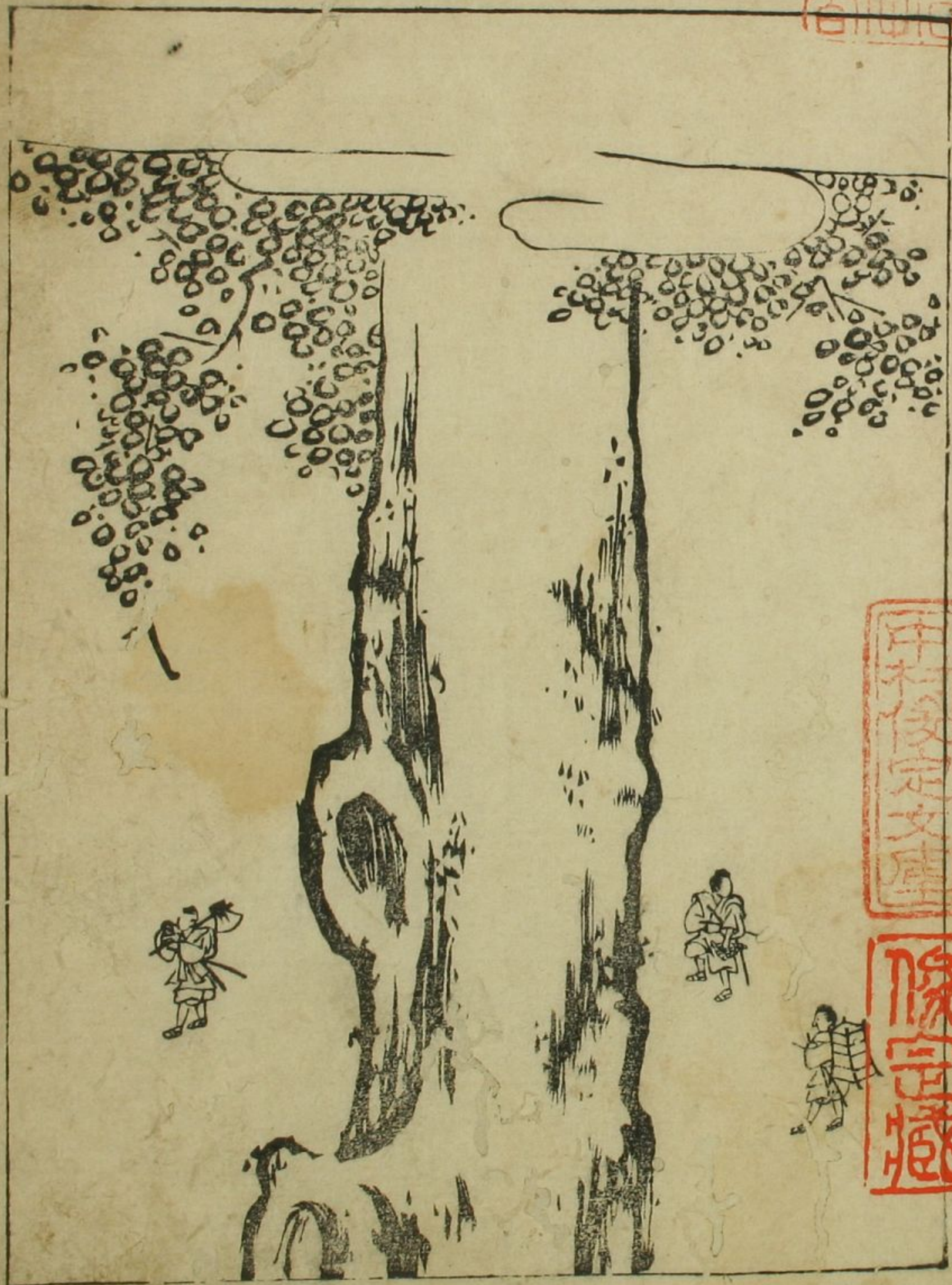
夏山伏

全

中村俊定文庫  
文庫 18  
237



Red square seal impression in seal script, likely a collector's or publisher's mark.



Red vertical seal impression containing the characters '中村俊定文庫' (Nakamura Tadamasa Bunko).

Red vertical seal impression containing the characters '俊定藏' (Tadamasa no Sazae).

箱根温泉の湯をむとせりきよ  
山体も門もくせんとしつた借使の  
かしく世歌とせしこゝろに  
酒汲らんと申すも百明の湯を  
あそびも世時よこせとせりの  
先達とせりゆるとせりけ

兜巾

夏菊と打て兜巾の首逢ふ 百明彦

藤掛

とくつちや一新つゝの 集月晴 孫河房

裸貝

うけ持て清みの時宜やゆりの貝 松菰房

千時元文二丁と亭六月廿日

辭別

羨信りよ心華月の山を後 玉石  
 春秋の梓や旅の森の飯まう 名木  
 旅のしらや時雨も日紅れ用え美 琴堂  
 甲斐くー玉衣高の裾うさ 孤桐  
 膝蓋もやう古びん八月白 女 美月  
 湯衣少も入梅の口うーや深ふゆり 女 妙松  
 先くの宿此も香や新茶時 千林

春も入れば湯の山をやかくささ 宗二  
 馬の尾よとりつて壘も浦ふー 甄紫

師の香箱入湯と  
 信く年て中ふれ

仗のるよあふれ薬の紫れ夜更 片石  
 手の届く山もあふれーいらと時 榎谷  
 ほつた足まうた空や郭公 新産  
 咲残れ華月や岩よ待もあふ 雅之  
 華の竹よあふれるのふりや 巴鶴

出羽

前刻

夏河

紫陽花の影をいづるを首尾の雨

古葉をとりしに藪垣 竹外

白きの一刺毛つゝ小室をて 童牛

子なき舟の影も去り 踏賞

久家毎の小枝ありとほしに 抱雪

と都高いも先づ掃除が 西奴

柳をよれ橋あり月もねに 古道

池ありとほし 竹の穂を 執筆

右一葉を由國橋までよつとけし  
又とほしりのくくは舟中の影を

後刻

紫陽花をよすつてささく深沼を 童牛

涼風の先づやま 草途舟 古意

雲より来たれぬのくくや和舟を 抱雪

心舟の帆もあくありや学也 三峽

海山一子ありとほしや鼻月暗 竹外

目赤れぬ花舟もうらや  
結こゝろの舟のうらや  
個の位をよそへて

藤ひり— 家住台のり— 花  
娘小妻ら— 舟や 細き楫棹  
夏柳舟すれに舟もはるら  
花ぬ

瑞上守と  
えやうく

舟— ち遠き  
種やまふ  
春何

古くは強の  
ふくまふ

舟— 念はあり— 園のふ  
花ぬ  
花大佛のまふ

陽極の燈籠や— 舟をて大佛  
花ぬ

舟の高柳の若ぬまふ  
舟の舟も  
舟の舟も  
舟の舟も

舟竹や— 舟も— 舟も  
舟花

結ぶ

世はよりの色もさよ夏木立ふり 盈枝  
まめと川舟くじまの別色こ 敷氷  
毎のやまのありまふたつ川傍 鵜牛 古淵

神奈川の

駈あて

湖の松北尺う人も涼し神の浦 夏阿  
河井上よ八月のまゝやうき流し 兼七

武藏相模の境

眠るをぬるや境の木下雲 雪貴  
世行幸あり

あらしも借よ紅くや嵐を 立

大正の舞子安らふ一雨よそまはれ  
八月のまゝさうく晴もあけふ里北  
さういふおのまゝ一客もあつた  
田舎者のまはれ

情の火をわけておのれ雲く柳 春阿  
去るまゝの娘とよよく一影をふり 雪貴

右のあやしの巻後小冊子まよ  
布子田といつおとよて

ま揃や先つゝひの上ねれ 来七  
布子着て見と行つて田極小 皆也

良辨滝

岩端よ尻と冷とや流の下 来ぬ  
日の系と流つゝぬ滝や虎耳草 皆也

逢中吟

先達の是れ何つゝお苔の巻 来七

十八間の九折と麻法事れ  
こゝろよ腰と押さぬ

まあまの白れと涼とんるぬ 来阿  
操押や片もよとめり行成ひ 来ぬ

登心

子のひりの成信や夏の音はに 来阿  
くろくろの音の着ぶや古来立 来七  
かれまよふよ吹くそま 来ぬ  
いらとゝあま祖の信つゝも待の繩 皆也



Wine shop

酒の店  
こころこころ

酒のせしめとわん(たぬ)のりせ 奉屯

養毛作とのやぶ事

ねるおしー

八月の空やう上れ養毛山 清貴

吟行

塵くふらぬあなふや事之 長河

養毛のちよよいこころいや  
はのちうこころいこころい  
養毛のちよよいこころい  
こといこころいこころい  
まのちよよいこころい  
いよよいこころいこころい  
まのちよよいこころい  
まのちよよいこころい

飯の掘 飯のちよよいこころい 長河

酒の店  
こころこころ

行 行 行 行 行 行 行 行 行 行

小田原より極楽の河原へ赴くよわい

思ふ程のよわい心は極楽のよわい  
いづく河原のよわい心は

よわ

舞のうらやまのよわい心は

杖と川よわいよわいの上 極楽

舞のうらやまのよわい心は

極楽へ来た

とくーとわんをくふわの神 舞

海へわたすわんをくふわの神 舞

お

又とくーとわんをくふわの神 舞

小田原連中

とくーとわんをくふわの神 舞

とくーとわんをくふわの神 舞

とくーとわんをくふわの神 舞

とくーとわんをくふわの神 舞

とくーとわんをくふわの神 舞

とくーとわんをくふわの神 舞

其のうらふも高し〜くこま 意白  
伸すくもりよのいさや 舞舟 煙河  
穀桶と一おとさく〜 舞 煙籠  
そく海やめもむりて 待時 和 融雨

長無心よの海に能信の業のよ  
寺中跡りよく〜

一吸寺

瓶うら〜く〜一口つや 答 清 有 長河

金屏山

金屏よ一刷毛 漆〜山のま 西如

扇面海

あつれ〜ふあ扇も上 籠り 招 取 日 海霞

早重寺

徳空居士の  
扇さあ〜

ふと卒の葉〜と〜て 二お 生 糸 長河

塔の伝

春屋何系か  
り〜と〜

若の戸や毛袖 句〜と 飯 世 常 立

昔おはなよふくくと  
ものゝら<sup>カシカ</sup>はあはれあるよ  
その<sup>カシカ</sup>新あつとさあふり  
枕上のあふんとく人  
糸糸帯とあつとく

新写くおやふんくわく六月宮

徳吉貞

触うと新のこひやさふる

尾ぬ

はらうれや新のあふもわたり川

夏阿

まよふとていん  
心流のあつとく

ふる台のむさうり小塔

海句  
夏阿

味新結よとていん

心流のあつとく

小田原

ふと流の目新いりり風味

馳雨

おそ新のあつとくわはの縄

塔の原  
壺心

白けう湯のあつとく

まよふとていん

夏阿

六月旬のあつとくや海音

新よやあふ網のあつとく

白け

あなただけの園のあつたさる人あつた  
宿のあなただけのいしと包とくさくさ  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

諸人の神をいふにや斥さぬ 春阿

八月雨や坂よひのりつゝくきつたのき 澄也

湯のいふにたつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

こらつても活きの草の若く即 宗信

凍りさもさつたや裸のつめひつた 至芳

室障のそめけの縁やあつたあつた 秋陽

湯の中なるに神のあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

秋後

白湯の前集よかさん田極言 野紅

吹せり神のあつたあつたあつたあつた 淳涯

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 其山

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 白狐

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた 不薄

降つてく月あははの言はれ文  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと  
まうとまうとまうとまうとまうと

春研

川書と屋よまうあて堂う柳

ひくくくくくくくくくくくくく

春實

流伽と流伽一袋の細解く

柿の好織も古い百性

阿

門あよ家そのくくくくくくく

立

流の岸のと徳孫竹あは

也

色あよふああああああああ

立

あめああああああああああ

阿

講釈のせむい浅きに相違を

そらうく結ぶころも入用

大根も狩りてくふよみ六年

永保局の好いよ能因

是式の細上と月のるまを

仲行とよれるよ平福にあうむ

船杯のせむあうく秋の月

鷺さうゆりむくまの古寺

也

何

也

何

也

何

也

何

藍さうらうくまのむ

使もむのまのしり神

風巾もよも今のまのく

ふ郎のまのまのまを

園にむのむのまのま

まのまのまのまのま

まのまのまのまのま

猫道しりてむのまの唐紙

也

何

也

何

也

何

也

何

小獨立せよとの留り降るる

揺らぐも少く飽うぬるる

まゆもあはれの通つて又まゆ

癒えおらるる秋の月

下へもあはれもより一葉を扇の目

信條の信留るまはるる

継おらるるも姫と作又の中

服の布留るる細くを貫信

白くもあはれもより一絲の飯

海よりあはれもより一丈

世の世よあはれのあはれひ

あはれもあはれもより一

塔のあはれもより一

あはれもあはれもより一

熊丹拾遺よ  
信て

信解もあはれもより一



廿八日 塔の風とまてぬこと

おとりのも 持てたてた信ありき

名も入養の江東の松ありけり  
かきひてひてひりか細く細きとあり  
飛つるもさうらひありてはなれ  
は師のそむとまをいひておとれる  
秋瓜坊あり 機も比擬して師  
ふらんかきひてまてていひやあて  
係いつく思ひまてたててあま御あま  
とるあやや折し一かいた松の松東一見よ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろ  
あらんいさすらんをさぬらんとして  
あすす織らんとして

中よりの海とていふ海一

瓜とていふ瓜とていふ瓜 秋瓜

帯の松屋印をたててあること

又月のを信つてはまきとて信り  
りよれよ 鎌や鎌をまきよにまき  
おし一帯のまきよあつてまきよ  
まきとて信つてはまきとて信り  
あつてまきよまきよも勝勝とて信り

八月のまきよとていふ瓜 秋瓜

あつてまきよまきよの八月不二 西奴

山中家

山中家とていふは山の中なるをいふ

山中家

山中家

目の下に青田や園とていふは

三信明神あり

卯のむのき解や神子の祀候あり

の梅晴や晴の報に神系堂

千貫極よとていふは  
かたていふは  
さき金とていふは  
世に松子のあり  
あらねば  
あつた

松子や中

松子

松子とていふは

作は之指指石矢亭る京種を解く  
其は其ののさつひとゆきく  
むけの骨のまは清く色を露の  
まはとくまきりはまのついで  
甘くそ遠きついで

長月の末節とまておまの  
海口をたのむははまの  
縁結のあま一はまのついで  
風流とくくまをまらむ

節いて

神も縁を結の

日教の卯

くまは

八月の海は作事知氏の件はまらりく  
細心の神も縁を結のありまのついで

八月の末節とまておまの

秋風

いとむくは門のたつり大 石矢

あこれのま月朔日水はまらりく  
風よ起て後の感縁正しくりてまらる

高き高きのついでとまておまの

高き高きのついでとまておまの  
高き高きのついでとまておまの

高き高きのついでとまておまの

高き高きのついでとまておまの

浪津連中

神の香よ 新葉とくぬ 田舎乃 英和

奥山の石 田舎乃 初紅

鳥のあもら 田舎乃 致瀟

吹向よ 田舎乃 蒼山

毛鷲も 神川とぬ 田舎乃 如藍

つばあしと 田舎乃 洞牛

いんづか 田舎乃 桃枝

さか〜と〜ぬ 野乃 古石

里々字 何の香も 田舎乃 野茶

和歌よ 田舎乃

山と 熊の 樽井川 田舎乃 秋風

田舎乃 田舎乃

英和亭の 田舎乃

川 橋の下 田舎乃 秋風

田舎乃 田舎乃 英和

室も新ひーすまゝの暇りなれり  
くろくたふて又縁の縁もあつた  
中も縁も中肉心の縁つたけり  
三人あつたり

吉田村あり

三河の川を渡るも田舎に 秋風

岩淵とて中村よりやいふ  
小山の神よりおのれを解て

そよよ新ひあつて不二涼一 西ぬ

薩埵越

石ひり酒と扇よ扇をー 秋風

清見寺

おろし淨涼日とく  
為僧のあまのりまわ

帯とれた坊うぬ涼ー清見寺 秋風

清見とて雲の紫越の轡あり 西ぬ

鳴蟬やあつては清見寺 中ぬ

三保明神と

地一

何茶やと保の香花のまきあり 秋風

三層の宮も楠のみ葉あり 西奴

神風のくくあつて保の松 野海

毎の節（針く）  
信守の道方おふお

秋風

至るまでおのゝくに輪をめぐら

ほくほくおのゝくに酒 西ぬ

其の心に海をよそへて

海をよそへて海をよそへて

海をよそへて海をよそへて

海をよそへて海をよそへて

船も若く押流さるる川 空

からいへ中井の歌

のりくおのゝくに

かりりや海をよそへて青い波 空

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

おのゝくに海をよそへて

あつたまゝに  
あつたまゝに  
あつたまゝに  
あつたまゝに  
あつたまゝに

閑樹亭

あつたまゝに

秋風

あつたまゝに

あつたまゝに

あつたまゝに

あつたまゝに

旅人

あつたまゝに

舟中

あつたまゝに

閑樹

あつたまゝに

王女

あつたまゝに

六月

秋風

あつたまゝに

名

向別 度信公 徳文良 子彦

石舟子より伝きて此の御札  
刊布のりつふりては

あまのこころのちやよ

あぬ

あめのこころのちやよ

あまのこころのちやよ

石舟

箱根権現

あまのこころのちやよ 西奴

あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ

あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ  
あまのこころのちやよ

あまのこころのちやよ 西奴



文の下  
あ

蘇州へ仕立てて涼し峰の月

ま何

今と今の竹よるんあ〜こめ

梨造

宮之下連中

春の心も草薙むまぬ湯の白

梨造

湯ありの影よ竹も〜ま〜

吐き

清き青や高紅梅の胡ハ義

露十

秋も今もて〜ふ〜ん〜

其秋

軒涼〜雪あけ早下も〜

堂下

李人

湯め〜の苗のた〜〜  
さり居ゆたゆ〜兼て物〜  
江戸の雀も〜あ〜一子〜  
織中〜あ〜其〜事〜  
上総〜の村〜  
せね〜

懸〜涼〜〜ん海〜山 雪實

花好坊〜のま何先生の信〜  
入湯〜

上総

其〜よ〜傳〜や〜〜 君山

涼〜〜い〜の涼年の涼の音 常馬

浦ふーとあふふひて物舞  
壺あつて怪やまの森のまふふ上弦  
専婆音牛

見の入場の  
あまを福うて

入梅室や思ひてお湯の煙り五  
和御五

東武うす三人あつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ  
とてあつてさうさあつてさうさ  
とあつてさうさあつてさうさ  
其うおさうさあつてさうさ

町屋物しぬまの蛇まやふり

洗ふあまふれは夏の夏月 竹外

はらばらあつてさうさあつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ

方ありやあつてさうさあつてさうさ 竹外

ふとー一脱川あつてさうさあつてさうさ 抱き

あつてさうさあつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ  
あつてさうさあつてさうさ

山河あつてさうさあつてさうさ 敲氷

湯のつのはぢもさぢいよふぢぢ  
まじいひつちよふぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
一ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ふまるとちつや浦まのぢ屋の月 ちま何

ぢぢぢぢの 仲 ちま 涼風 伝古

まぢのぢい伝自村よぢぢぢぢぢ  
まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

唄 ぢぢもぢぢぢの 團扇 ぢぢ 傳書

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ  
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

大唄

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ 西奴

三好 傳書

ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ 敲氷

松山宿

あふみよのふら其のふらや其のぬ 抱き

三三鶴

三三鶴とてなりてよのく若く如 竹外

其の返句の

浦ついで

三三

いりくのをそふ一線一はく月

雲の片ちうひく並み 春雨

各就別

か休もよの下のり一ちりさき 三 春

そ春も海もさあ 三 春

唄も又ついでり 三 春

大磯あ〜

いしひのふら其のふら一布の作と  
ついでる音子のももりのい〜

あふみよのふら其のふら 三 春

眺望

あつたふら其のふら 三 春

平塚の宿より懐かしい酒を飲む  
中へへ方のあつた酒を飲む

東野宿村史の序の文

東野

酒の香りと白くはなれり

暮れゆく夕暮の酒 千之

東野宿村史

東野宿村史の序の文 千之

暮れゆく夕暮の酒 扇山

夕暮の酒の香りと白くはなれり 扇山

東野宿村史の序の文 扇山

東野宿村史の序の文 千之

あつた酒の香りと白くはなれり  
中へへ方のあつた酒を飲む  
東野宿村史の序の文

東野宿村史の序の文 千之

東野宿村史

東野宿村史の序の文 千之

川の橋

琵琶はよめ日もうつむくおる金毛  
夏草やあつめよあまの河童子  
河神や河のむすめ酒紅の房  
山崎やけくさんさうふ金銀毛  
抱香

菊風くきて湖よひすくわう  
海士のまの精もあまの海月取

難物もあらしよ世海おるの上  
海士のまの精もあまの海月取  
西奴  
散氷

露田八情

鰯魚も河のうづりや社人達  
鴉鳥とあまの鶴もあまの豆の毛  
法室ようや葵の唐あし  
か湯との釜もあまの浦やあまの草  
白鳩やまき橋よあまのうづり  
さうさうもあまの草もあまの蓮の毛  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの  
あまの

毛の下のふくろのちりー体しあとの  
ありーいーの武をーとくさるやーよ  
ゆきとわーくはてまとのまを改め  
とろくー其歌と撰ふ

頼朝屋鋪

際々の孫のるもくやまのま 夏向

鳥はふ切通

石音やるの盤めれ切通ー 竹外

作三木馬吟場

くもつるもくまびてやまのま 西ぬ

舟屋中服茶の

舟のよの舟もぬまの舟のま 敲氷

盛久頼屋

ちのまのちのまのちのま 抱き

景清七官

瓜のちをくもあして 徳の貴

景清の掌のちをく

合作

浄土明神

石明臺

凡ゆる浄土の極楽や伽藍の肌 西奴

祢名寺

後川觀

予しあはる言のなや猿とくす 徳貞

能見堂

松籟庵

ありあまたあまのさかしのま 春河

右の小冊の湯のふれりまの連中と

まよふて顔の前おれまありとく

事とくあはるまのあまの眼とく

一とくあはるまのあまの眼とく

まよふて顔の前おれまありとく

事とくあはるまのあまの眼とく

まよふて顔の前おれまありとく

事とくあはるまのあまの眼とく



海の舟

海の舟を乗るに

十年

舟の舟を乗るに

舟

久文二丁巳孟秋日

百明臺

綾川觀

撰

